

健康文化

いつまでも続く戦後

前越 久

私が昭和20年8月15日の終戦の日を迎えたのは小学校4年生の時であった。母子家庭であったので名古屋空襲が激しくなると予想される前の昭和19年7月、小学校（当時は、国民学校）3年生のとき、名古屋市昭和区若柳町から岐阜県益田郡小坂町川井田（現在の下呂市小坂町）に強制疎開することとなった。母の話では、引越しに要する費用などは名古屋市から支給されたとの事。今のJR高山線で高山から4駅名古屋寄りの小さな町であった。

「…耐え難きを耐え、忍び難きを忍び…」の玉音放送は、高い山に囲まれたこの町では電波の状態が悪かったためか雑音ばかりで聞き取りにくいものであった。当時、我が家にはラジオなるものはなかったため、ラジオを持っている家に近所の皆も集まって聞かせて頂いたものである。聞き取れたとしても小学4年生の私には何のこともやら全く理解できるものではなかったが、周囲の大人たちの話から、どうも日本が戦争に負けたらしいという状況が伝わってきたことを覚えている。

小坂町は名古屋市より標高が高い（約520m）ので、都会から移り住んだ者にとっては慣れない冬の寒さや積雪の違いなどに随分と悩まされたが、戦中・戦後は食料難で、母子5人と祖母の6人家族が食べていくのには更に厳しいものがあつた。母は亡くなった父の衣類などを持って農家を訪ね、米をはじめ、農作物など食料との物々交換に精を出していた。この地方では、丁度人の背中にぴったりの大きさの竹で編んだ直方体の籠に、両腕を通す幅広の肩紐つき“ござ”（しよい籠）が重宝されていて、母などはすっかりその土地の人になりきって、この“ござ”を背中に農家を回っていたように思う。いわゆるリュックサックの代わりである。子供たちは、学校から帰ると山へ山菜取りに出かけたり、秋には毎朝暗いうちから栗拾いに出かけたりした。あらかじめ目星をつけておいた栗の木の繁る山へ登るのである。友達と一緒に出かけるのであるが、やはり土地の子供たちはすばしっこくかつ落ち栗を見つけるのが早くて私の2倍くらいはいつも拾っていた。イナゴ捕りもやったことがある。稲が刈り取られた後の田んぼにいるイナゴを捕まえて、佃煮にしたおかずは香ばしくて格好のたんぱく源であった。ときには魚を食べようとしても、冷凍技術が全く普及していない戦後の

頃では、魚屋さんが売る‘海の魚’は塩漬ばかりで、まるで塩のかたまりを食べているようなものであった。

当時この町には呉服屋さんは何軒もあったが、八百屋さんなる店はなかったように思う。従って、野菜などは家から4kmほど離れた“郷石原”という村に、母方の遠い親戚がありここへ分けて貰いに行っていた。4才年下の弟と2人で、例の“ごぎ”を背負って徒歩で1時間以上もかかったであろうか。ここのお爺さんもお婆さんも大変親切な方で、いつも「よく来た、よく来た」と言って持てるだけの野菜や草履用の藁を頂戴して帰ってきたものである。一方、向かいの呉服屋のお爺さんも好々爺で、畑から採り立てのきゅうり、なす、かぼちゃなどを我が家の勝手口にとっと置いていてくれるという本当に親切な方であった。また、お風呂は右はす向かいの床屋さんが毎晩呼んでくださり、銭湯などがないこの町では本当に助かった。

子供たちの履物は“藁草履”が主体であった。小学校へも藁草履で通っていたように思う。姉たちは下駄を履いていた。藁草履の作り方は近くに住む1~2年上級の先輩が手取り足取り教えてくれた。農家から貰ってきた一束の藁に、口に含んだ水を霧吹きして、石の上でトントンと木槌で叩き、藁をやわらかくして草履を編むのである。鼻緒のつけ方など今は忘れてしまったが、何十足も作って天井からつるしていたものである。藁草履は2~3日も履くと擦り切れてだめになるので家族用をまかなう私の役目はそこそこ忙しいものがあつた。最近、坂本竜馬の妻“おりょうさん”の写真が見つかったとの新聞記事を見たが、終戦当時から遡ること80年ほど昔の坂本竜馬の立像の写真では「靴を履いている。どうも革のブーツらしい」という記事にも出会った。とすると、私どもの当時の生活は幕末以前に逆戻りしていたのかも知れない。

家族は、私が小学3年から新制中学2年までの約5年間、小坂町でお世話になった。いろいろと思い出深い小坂町の生活ももう63年も昔になる。当時の小学校同級生も今は70才を過ぎ、最近有名になった“後期高齢者”への仲間入りも近いお爺さんやお婆さんになっているはずである。それにしても戦中、戦後の過酷な時代、栄養失調にもならず、疎開者である我々家族が健康に過ごすことが出来たのは小坂町の皆さんの支えのお蔭と感謝している。暖かく接して頂き、大変お世話になったことを忘れることができない。

今回は、大戦中の疎開生活から書き始めたが、その切っ掛けは今年になって我が家の近くで大型不発爆弾が発見され、周辺の住民が一時避難せざるを得なくなったという事態が起こり、そんなことからこの表題を選んだわけである。我が家は名古屋市の

中心部、東区葵一丁目にある。近隣での不発弾発見は今回が4発目である。高層建築工事が始まるとたびたび見つかっている。

平成20年3月22日、我が家から約200メートルのところで250キロ爆弾が建築工事現場から見つかって撤去作業が行われた。陸上自衛隊の不発弾処理隊が信管の取り外し作業を行った。周辺の住民約3,000人は午前9:30までに300メートル以上離れた小学校や福祉会館などに一時避難した。周辺の道路は通行規制となり市バスなども迂回運行することとなった。前日、現場を見に行っていたが、5メートルくらいの深さの地中に不発弾が横たわっていた。太平洋戦争中、米軍が名古屋を空襲した時落した爆弾であろう。直径約30センチ、長さ約1.2メートル、弾の頭と底の2箇所に信管があったと報道されていた。2つの信管が無事取り外され安全宣言が発せられたのが正午過ぎであった。空爆中にもし爆発していたら多くの人々が亡くなっていたかも知れない。不幸中の幸いであったが63年も経過した今、不発弾処理に当る陸上自衛隊員にとっては決死の覚悟で処理しなければならないという厳しい仕事であったはずだ。

日本中至る所で不発弾処理は今でも頻繁に行われている。平成20年5月19日付け新聞報道によると、東京都調布市国領町で不発弾撤去作業が行われたとのことであった。名古屋での不発弾処理ニュースのわずか1ヶ月後のことであった。ここは、米軍のB29が積載していたと見られる1トン爆弾であった。直径約60センチ、長さ約1.8メートルであり地中3メートルから見つかっている。市は現場半径500メートル以内を警戒区域とし、入院患者などを含め約16,000人が一時避難した。1トン爆弾ともなるとさすがに規模が違うものである。しかし、戦時中ではこんな爆弾を善良なる市民が生活する地上へ容赦なく何百個も空から投下するのであるから戦争とはむごいものである。

最近、不発弾で有名なのは世界が問題視しているクラスター（集束）爆弾である。1発の爆弾が空中で子爆弾を多数撒き散らし、一度に広範囲の目標を破壊するという通常兵器である。ベトナム戦争で使用され、イラクやレバノンでも使われたとのこと。これがまた粗悪品で不発弾が大量に地中に埋まり、地雷のようになって子供を含む罪のない民間人の死傷が相次いでいるとのことである。実に悲しいことだ。

この美しい星、掛替えのない地球上では戦争のない世界にしたい。何十年も何百年も苦しむ人達が後を絶たないからである。きっと地球上が小坂町の皆さんのような人達ばかりなら戦争はなくなるに違いない。（'08.6.30.記）

（名古屋大学名誉教授）